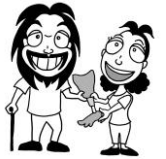


ONE LOVE 通信 51号

2014年3月8日発行

今年はルワンダの大虐殺から20年目になります。日本の学校でルワンダの話をさせてもらおうと、生徒・学生たちは既にその出来事を知らない世代になってしまいました。長い年月が経ったと思うと同時に、そこで生活している人たちの気持ちを考えると、決して短い時間ではなかったのだらうと思います。

4月、あの悲劇が起こった季節、ルワンダ各地で虐殺20年目の式典が行われることでしょう。彼らの気持ちが、そして失われた魂が休まりますよう、私たちもこれから先、できることをやっていきたいと思います。



【ガテラ、久々の日本を満喫す】

去年10月中旬から今年の1月まで、日本に滞在しておりました。最近はいつも寒い時期の来日となってしまっております。が、夏は夏でとても暑いそうなので、高原のような気候のルワンダにいたほうが良いのかもしれない。

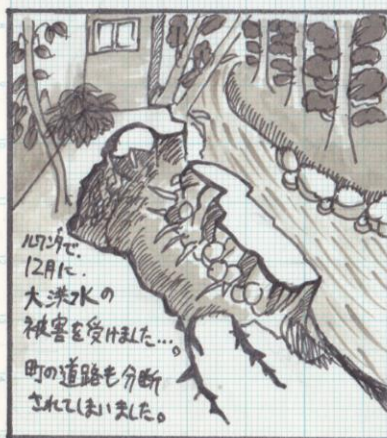
この数年間、ガテラも一緒に来日していたものの、いつも急な用事でルワンダに戻らなくてはならず、日本を楽しんでもらうことができませんでした。今回はそうならないように、ルワンダ・ブルンジでの仕事の段取りをいつもより慎重にしての来日でした。その甲斐あって、ガテラも約3か月日本に滞在し、共に行動することができました。

今回の滞在中も、いろいろなところを訪ねました。ワンラブのサポーターが各地に生まれつつあり、お話をするための段取りを、それぞれの地域の人に手伝ってもらえるようになってきました。つまり日程と場所を決め、そのための広報をするということ、皆さんが手伝ってくれるということでもありますね。

これらの手配をしてもらえるというのは、本当に助かることです。特に場所取りや広報は、その土地を知らない、何からスタートして良いのか、全くわかりません。今回、私たちは自分たちのスケジュールを、彼ら縁の下の力持ちたちに伝えるだけで、後はその場に直行し、話をするという状態だったので、とても助かりました。まずは段取りを取ってくださった皆さま、どうもありがとうございました。

ガテラが特に訪問したかったのは、東北の被災地。当時ルワンダでも映像やニュースで報道されていたので、様子は知っていたものの、その後どうなったのか、とても気にしていました。

何も無い野原になってしまった場所に残された誰もいない駅。線路がなければ、ここが駅だったということはわかりません。ただ黙々とビデオを回すガテラ。何を考えているのか？そして防災庁舎の跡。この一帯でたくさんの方が命を失いました。それでも生きていかななくてはならない残された人たちの姿を見て、改めてこの世で生きるという



事の大変さを感じていたようです。それは多分、ルワンダの大虐殺で失った人たちを思う気持ちと同じだったに違いありません。

今回うれしかったのは、二つの再会です。一つは20年以上前にケニアで生活していたころの友人との再会です。私はその頃ケニアでスワヒリ語の勉強を、ガテラはルワンダを追われ、難民としてケニアで生活をしていました。

その女性はガテラも住んでいた長屋で暮らしており、初めての出産をしました。生まれた子は花子と名付けられ、その長屋のみんなからとてもかわいがられたそうです。またガテラも花子のことがかわいくて仕方がなかったようです。その後彼女は日本に戻り、さらに二人を出産し、今はシングルマザーでがんばっています。時々彼女の様子をフェイスブックで眺めていて、会いたいな〜と思いを募らせていました。

そんな思いはいつかかなうものだなあ。彼女は九州の女性なのであるが、今回念願だった九州方面へ上陸することができたのです。



20年ぶり以上の再会。あの頃を思い出して、懐かしくなった。次郎君(左から2番目)のちょっととんがった頭がナイスだし、ガテラとどこか感性が似ている...

それにしても！20年以上ぶりに会うというのに、全く変わっていない彼女。ほんわりと自然体のあの時のままで、こんなに月日を感じなかったのは久々だ。そして私がつても会いたかったのは、彼女の次男である。障害を持っているということであるが、彼女のフェイスブックからにじみ出てくる彼の魅力的な感性にぜひ触れたかったのである。

いや〜、いい味していた。そして彼は商才にたけているのである。彼は当日缶バッジを売っていたのだが、これが結構売れる！障害のため、彼の言葉を理解するには母親である彼女の力を借りなくてはならなかったが、時間があればじっくりと彼と膝を突き合わせて、話をしてみたい。よ〜し、また今度日本に来たときは、じっくりと話そうではないか！

それからもう一つの再会。

下北沢での活動報告会。質疑応答の時、手を挙げた一人のうら若き女性。彼女は自己紹介をした。彼女はこのワンラブ通信でも何度か紹介している京都のS小学校の出身。この学校はワンラブがスタートした頃から支援を続けてきている。彼女はそこで「ルワンダレスキュー隊」というグループのメンバーとしてがんばってくれていた。

小学校卒業後、同系列の中高に進学し、そこでも支援のために動いてくれていた。しかし思ったようにいかなかったようである。最後に彼女と出会った時、自分一人でワンラブ支援に奮闘して、誰も彼女に続いてくれないと行き詰っていたようである。そして思わず私の前で涙をこぼした。その時、私が彼女にどんな言葉をかけたのか、多分偉そう

なことを言って励ましたのであろう。でも一生懸命サポートしてくれている彼女に、少しでも力を与えられればと思った。そして泣かれてしまったことに戸惑ってしまった。だって目の前で、大人になりつつある女の子が、私たちのために涙を流しているのだ。

数年ぶりに再会した彼女は、すっかり年頃のお嬢さんになっていた。今は大学で医学関係の勉強をしているという。へえ〜、すごいなあ。あの時に泣いてしまった女の子とは思えないくらい生き生きと、そして今を一生懸命生きているのだ。ガテラも私も思わぬ再会に驚き、喜び、一緒に写真を撮らせてもらった。未だにワンラブのことを考えていてくれて、こうして話を聞きに来てくれたということ、こんな喜びはあるだろうか。



4年ほど前に、ワンラブのために涙を流した彼女。制服姿だった彼女が、大人に変わる姿を見られたのは、とても幸せ。

これからどんな女性になるのか。楽しみだなあ。私たちが負けてはいられないぞ。

それにしてもこうしていろいろなところを訪れ、いろいろな人に出会えるというのは、本当にありがたいことです。20代ころOLをしていたときは、人との出会いがほとんどなく、また出会ったとしても、同年代の人が主だった。でもこの活動を始めてから、若い人も、お年寄りも、さらに本当に多岐にわたる仕事に携わっている人に出えるようになった。話をしても、とても刺激がある。お年寄りからは人生を、若者からは忘れかけてしまったパワーを教えてもらえる。

欲を言えば、あちこち回ったついでに、その土地のおいしいものを食べたり、温泉につかったりする時間と心とお金の余裕がほしいところである。

毎回どこかに行くたびに、今度こそは温泉旅館にでも泊まって、舌鼓を鳴らそうなどと思うのだが、多分根がケチなんですね。結局普通のビジネスホテルに泊まって、居酒屋もしくはファミリーレストランで食事を済ませてしまう。さらにケチだなあと思うのは、ホテルのバイキングの朝食で、いつもはそんなに食べなくて、ここぞとばかりあれもこれもと取って、朝から満腹になって、それで満足してしまう…。そのたびにせこいなあ自己嫌悪に陥るくせに、次回も同じことを繰り返してしまうのだ。ああ、一体私はいつになったらド〜んと構えることができるのだろうか。

しかしまあ、とにかく今回は、ガテラと一緒に動くことができたから、それでよしとしましょう。久しぶりの日本、ガテラは楽しんだかな？

ルワンダにいと、ガテラの精神は休まる場所がないようである。つまりいつも携帯が鳴るので、全く落ち着かない。しかもルワンダの人たちは相手を思いやるという気

持ちがあるのか?と思いたくなることもしばしば。朝6時から、あるいは夜中の12時に悪びれることなく電話をかけてくる。さらに、その内容!泥棒に入られて家財道具を盗まれてしまったから、それを買うお金をくれとか、仕事をクビになってしまったから、仕事をくれとか、喧嘩で殴られて前歯が折れてしまったから、治療費をくれとか…。しかも!別に仲の良い人からの電話でなく、一体誰だ?と全く知らない人からの電話なのである。

こりゃ、疲れますね。よろず相談屋ではないのだから…。だから日本にいと、そんな電話から解放されて、心休まるようであります。そして時間の空いたときはジムに行く。運動嫌いの私と違って、ガテラは体を痛めつけるのが好きなのである。行くとき5時間くらいはそこで過ごす。ジムで汗を流し、お風呂とサウナに入って、さっぱりして帰宅するのだ。しかもありがたいことに、このジムのオーナーは、タダで使わせてくれるのである!う〜ん、こういう支援もありがたいなあ。

そんな日本での日々。心も体もリフレッシュして、いざルワンダへ!しかしルワンダで待っていたものは…?

【神はワンラブに災難を二度もたらした】

あれはクリスマスも間近のころ。ルワンダから電話がかかってきた。

「昨日、大雨が降って、また大洪水になってしまった」

それを聞き、目の前が真っ暗になったガテラと私。頭の中をいろんなことが駆け巡る。私が真っ先に考えてしまうのは、その修理にかかる費用のことだ。そしてガテラが考えることは、その修理の方法だ。その電話がかかってきた日は、二人ともまるでお通夜のような。頭がいっぱいで、

何から話してよいのかわからないし、口を開けば否定的なことばかり。やっとこの間の洪水から立ち直って、再スタートしたというのに…。

またガテラは一足先に帰らなくちゃいカンのか?と思っただが、もうじたばたしても仕方がないと、とにかく応急処置だけさせて、日本の予定をすべてこなし、後は帰ってから修理という結論を出した。しかし実際のところ、それからガテラは何をしても気がそぞろで、多分一刻も早くルワンダに戻りたかったに違いあるまい。人から話しかけられれば笑顔を見せていたが、心の中はものすごくいら立っていたのである。

そしてルワンダ到着。泥などはすべてきれいに取り払われていたが、汚れてしまった壁を塗り直したりしなくてはいかん。でもそれ以上に直さなくてはいけないのは、また同じように大雨が降った時に、水が流れ込まないように防水堤を作ったり、必要に応じて土を盛りなくてはならない(ワンラブブランドは低地にあり、四方から水が流れ込んで



低くなっているところに、せっせと土を盛る。ガテラ監督の厳しい目が光る。

しまう場所に位置しているのです…。

でも今回の洪水で、一番、一番心が痛んだのは、過去に撮った写真が水浸しになってしまったということなのです。それらの写真は、虐殺直後のルワンダや、ワンラブの歩み



ルワンダ事務所代表ガテラより

【可能性は無限大】

2年ほど前、真美が手術をしたときの話。半身麻酔をかけられた。無事手術も終わり、しばらくしてこんな一言。

「足の感覚がなくて、変な感じである。持ち上げたくても持ち上がらない。なんだかとってもどかしい」そうだ。そして更に「このまま足が動かなくなったらどうしよう」…と不安そうな顔をする。

「う〜ん、そうか。ええと、パラリンピックで車いすで出られる競技って何があったっけ?」と俺。

そう言ったら、真美は目をまん丸くした。そして「なぜそんな肯定的な発想ができるのだ?」と言ってきた。どうやら真美はできたことができなくなる不安を感じていたらしい。

足が動かなくなることで、できなくなることもあるかもしれない。しかしできることもあるし、また新たにできるようになることもある。もしそうになってしまったら、それを受け止め、生きていかななくてはならない。だからそれほど深刻に考えても仕方ない。

それにしても今まであれだけ障害者と関わり合ってきたというのに、まだそれがわからないのか?それこそ自分がいつも義足を渡すときに、障害者に対して言っていることではないか。大体俺と何年一緒にいるんだ?そんなふうに「できない」という考えのもとに接していたら、俺たち障害者に失礼ではないか!

物事は後ろ向きに考えても仕方ない。今持っている可能性を十分に使うことが大切なのだ。

大体俺たち足に障害を持った人間は、いつも些細なことで転んでいる。この間も箱根駅伝を海岸まで見に行こうと思って、すっころんだ。そんなことは日常茶飯事なのである。いちいち「俺は足が悪いから転んでしまうのだ…」などと悲観していたら、時間ももったいないではないか。

これを機会に、真美さん、障害についてももう一度考え直しなさい。障害者の可能性というものは、本人の心がけと、まわりの理解やサポートによって、限りなく大きくなっていくものだということを。

だから俺は2020年の東京パラリンピック出場を目指すのである。今に見てろよ。

が写されていた。まだルワンダが発展していない頃、ワンラブランドでガテラと二人で泥だらけになって家づくりをしているところとか、ルワンダの人たちが一生懸命ワンラブの建物を建てるためのレンガを作っているところとか…。あの頃はまだデジタルではなかったから、写真がなくなったら、もうそれまで…。大げさかもしれないが、あの写真の中には、ワンラブの血と汗と涙が含まれていたのです。

それがもうない…。二度と手に入れることができない…。

東北で津波の被害にあった人たちが、何を失ってつらかったかと聞いたら、写真を失ったことだという人が多かったそうだ。その気持ち、今とてもよくわかる。

壊れた建物はまた建て直せる。ダメになってしまった義足の材料も、お金さえあればまた買える。でもあの頃の写真は、もう手に入れることができない。

つらいなあ。それらの写真は私たちの財産だったのに。やっぱり早く紙の写真をデータにしておけば良かった…。いつもガテラに写真の保存をしろと言われていたが、つい後回しにしてしまっていたのだ。後悔先に立たず。

前回の洪水のときは、ワンラブランドが特にひどい被害を受けたが、今回の洪水は町も広範囲で被害にあっただけで、町の中心地に向かう道路も寸断され、これを書いている現在、修理工事をしている。いつもレストランの買い出しをしている市場に向かう道も、水にあふれ、2～3日は車が一台も通れない状態だったとか。亡くなった人もいるらしい。

最近の雨の降り方は尋常ではなく、ゲリラ豪雨のような降り方である。そして乾季に入っても雨が降り続いたりする。ルワンダの気候もおかしくなっているようだ。

もうこんな被害にあいたくないな。めそめそしないで、直せるところは直さなくちゃ。自然の前では人間は無力かもしれないけど、やることをやって立ち向かおう。

濡れてしまった写真。悪あがきかもしれないけれど、きれいに剥がせるものは剥がしてみよう。一枚でも手元に残しておきたいから。



今号の患者さん

…と言うよりは、巡回診療に来る人たちの様子です。

ルワンダに戻って数日後、キガリから北西方向に1時間ほど行ったルリンドという所に行ってきました。

朝早く出発したので、道には霧がかかっているちょっと神秘的。そうか、朝早く起きるといことはこういう感動もあるのだな。最近はレストランの仕事もあるので、夜は遅いが、朝起きるのも少々遅くなってしまっているが、これからは早起きをしよう。

到着すると、既に20人ほどの障害者が集まっていた。時間前に来るとは、彼らもやる時はやるではないか。し

かし彼らがなぜ時間よりも早く来ていたかということ、実は来た人たちに交通費を渡すとアナウンスしていたからなのである。君たちの魂胆はわかっているのだぞ。

到着してもすぐに仕事に取り掛かってはいけない。ルワンダは形式を重んじるのである。まず地区長のところに挨拶プラス談話。この会話で今後の関係がうまくいくか決まるのである。

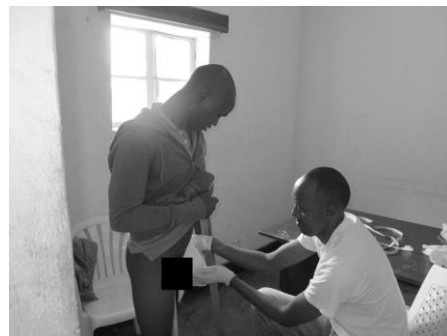
談話が終わっても、すぐに仕事をするわけではない。今度は障害者たちが集まっているところに、その地区長も一緒に行き、またスピーチが始まるのだ。本来ならば私たちの義足製作は、政府もしくは地区が義肢材料代の6割を負担することになっている。だから私たちは残りの4割を、寄付やその他の収入で賄うのである。しかし地区は予算が乏しい。この地区も年間にわずか5人分の義足を作る予算しかないらしい…。予算の少なさを、あれこれと言いつつ、何とか彼らの理解を得ようとしているが、あまりに少なすぎるぞ。ガテラも何とか政府や地区の支援を得ようとするが、現実には厳しい。

一通りの話が終わって、やっと仕事に取り掛かる。今回はワンラブの支援として（つまり地区からは6割の負担なし）5人分の義足製作、40人分の杖配布がミッションである。

時間が経つにつれ、少しずつ人が増えてくる。今回は彼らの交通費を負担するので、私の目は光りっぱなしである。同じ人が何度も交通費をもらったり、障害者でないのに障害者のふりをして交通費をせしめたりするのだ。だから紙に番号をふり、それを一人一人に配っていく。交通費を取り損ねてはいかんと、みんなの目もギラギラと私の行方を追っている。

巡回診療の時の私の役目は、義足の型を取ったりというよりは、最近ではもっぱらカメラマンである。ビデオとカメラを手にもみんなの様子を撮る。わざわざ履いているスカートをめくって、ぼろぼろのお手製の義足を見せてくれる女性、調子に乗ってなぜか踊りだす男性などなど。

受け付けをしている後ろの部屋では、義足を作るための型取りが行われている。そうそう、こっちの様子も撮っておかなきゃ。



おっと、大変！パンツを履いていなかった！しかしあくまでも冷静を装う私。

勢いをつけて、その部屋のドアを開ける。そこで見たものは！

う～む、そこにはパンツを履かずに、大切なところをポロリンと出したまま型取りをされている男性の姿…。

ま、まさか、こんな状態でいたとは…。うわ～、すみませ～ん、と思いつつ、うろたえていることがわかったと、相

手を動揺させてしまうと悪い、あくまでも冷静を装い、淡々とビデオを回していたが、一刻も早くその場を離れたくて仕方なかったのである。ビデオにそのポロリンの様子はしっかりと記録されてしまったが、再度それを見るのは結構勇気がいるであろう。

…と言うわけで、相変わらず田舎の人たち、パンツを履いていません。こんな場面に出くわすと、困ってしまいます。以前のワンラブ通信にも書きましたが、これからは義足を渡すのはもちろんですが、それと同時にパンツも渡すということを真剣に考えないといけないようです。でもお尻のおっきいおばちゃんに合うサイズ、日本にあるかしら？



紹介します！ワンラブのスタッフ

月日が経つのは本当に早いです。

ついこの間日本に来たと思ったけど、もう研修が終わりに近づいています。

フォンダシオン。少々ホームシックにかかりながらも、義足製作の研修を無事に終えることができそうです。

研修期間中、ちょうど私たちも日本に戻っていたので、いろいろなところに連れていったり、我が家に招いたり…と思っていたけれど、結局どこにも行かなかつたし、我が家に来てもらうこともできませんでした。彼は彼で結構週末忙しくしていたようだし、私たちも活動の話をするためにあちこちに出かけてしまっていたから。

数か月ぶりに会うフォンダシオンは、一回り小さくなってしまったような？それもそのはず、食事が今一つ合わないようだ。日本に着いたら食べようと思って、出発の時に大量にカバンに入れておいたキャッサバ芋の粉（ウガリ粉）は、道中カバンの中で爆発してしまい、カバンを開けたときは洋服やら何やら、すべて粉だらけになってしまっていたらしい。だから大好きなウガリを食べることができなかつたみたいだ。痩せてしまったのはそのせいかな？



親方と一緒に、ガテラの装具の調整をするフォンダシオン。うまくできたかな？

ガテラは日本の障害者手帳を持っているので、無料で装具を作ってもらえる。早速茅ヶ崎の巡回診療に行く。そこには事務の女性とフォンダシオンの姿。ガテラと久しぶりにルワンダ語で話をするフォンダシオンは、心なしかうれしそうだ。やはり自分の言葉で話せるというのは気が楽ですね。その気持ち、私も良くわかります。

実際に出来上がったガテラの装具は、主な部分は社長が作ってくれたそうだが、革を縫ったりする作業はフォンダ

シオンがやってくれたらしい。結構上手に縫っていた。縫っている間、社長が目を光らせていたに違いない。

3月半ば、彼はルワンダへ戻る。7か月間の研修を終えて、今度は自分の教わった知識を人に伝えるために。

せっかく教わった技術、大切にしてほしいな。自分一人のものにしないで、一人でも多くの人に伝えてください。

ルワンダには「まぬけのルガンゾ」という伝説の人物がいる。ルガンゾはいわゆる超能力のようなものを持って生まれた人のようなものであるが、その能力を自分一人で使って、他人に伝授することをしなかった。だからルワンダで能力はあるけど、その能力を自分一人で使って、人に教えようとしないうる愚かな人のことを「まぬけのルガンゾ」と例える。

フォンダシオン、ルガンゾにならないでね。期待しています。

【体格の違い？】

ブルンジで働いているフランソワズという女性と、私の身長はさほど変わりない。むしろ彼女の方がちょっと背が低いかも。ある時一緒に椅子に座っておしゃべりをしていて、そしてふと足元を見て思った。

椅子の高さは同じである。しかし彼女の足の裏はしっかり地面についているというのに、私の足はブラブラと宙に浮いている。

ん？ これはどういうことだ？

つまり背の高さは一緒だが、彼女の方が足が長いのである。う～ん、結構ショックな発見だ。

男性の場合、海外に行くとトイレのアサガオの高さで己の足の短さを感じるそうですね。ルワンダの男性用トイレもアサガオの位置が高いのかしらん？

また別の件。スタッフの一人が、他のスタッフのことを私に話そうと思って彼女の名前を言うが、留守中に雇った新しいスタッフのため顔と名前が一致しない。そこで彼女がその女性を表すために使った表現「おっばいの長い女性」。

う～む、おっばいを「長い」と表現するのか…。

ガテラから聞いた話。やはり同じくワンラブのスタッフであるが、非常に胸の豊かな女性がいる。…と言うよりは胸が、あの、何と言いますか、昔、ドリフのコントで志村けんがおばあちゃんに変装したときに胸につけていた、靴下をぶら下げたような形のおっばいをした女性がいる。

彼女は赤ちゃんをおんぶしながら農作業をしていたが、赤ちゃんがおっばいをほしがって泣き出した。そこで彼女はどうか？普通だったら、赤ん坊を抱いておっばいをあげるところを、その女性は赤ん坊をおんぶしたまま、自分のおっばいを肩越しによっこらしょうと後ろに回し、授乳させたとか…（言葉だとうまく表現できないのですが、想像してみてくださいませ）。

だからそんなことを考えると、おっばいが「長い」と表現するのも適当なのかもしれない。またルワンダの人は「長い」おっばいのことを、その様子から「靴下」と呼ぶようである。

日本人とルワンダ人の体格は、確実に違うのである。



日本事務所より

【ひとりごと】

1994年に起こったルワンダ大虐殺から、20年が経ちます。この20年間、ルワンダは復興と発展に向かって進んできました。その甲斐あって「アフリカの優等生」と呼ばれるまでの発展を遂げてきました。

しかしそのころから関わってきた私にとって、その発展が本当に正しい方向に向かっているのか？と思うこともあります。確かに都市部の発展は目覚ましいものがあります。でも田舎の人たちの暮らしは、あまり変わっていないように思います。

それは今回の巡回診療で思いました。都会の人たちの洋服はどんどんオシャレになってきて、みんなとてもきれいです。昔は都市でも穴だらけの服を着ていた人も多かったけど。でも田舎の人たちは、まだパンツを履いていないし、靴も古ぼけてぼろぼろのことも少なくありません。また行水を浴びるといっても少ないせいか、彼らが集まると独特の匂いがするというのも事実です。

もちろん彼らはパンツを履きたくないわけではないし、行水を浴びたくないわけでもありません。

それをするためのゆとりと知識が少ないということがあると思います。

都市部の発展を望むのは、決して悪いことではありません。でもこうした田舎の人たちが清潔で快適な生活ができるように、環境を整えていくことがもっと大切なのではないかと思います。私だけでしょうか？

虐殺から20年ということ、これは一つの区切りになるかと思います。それぞれが過去と未来を考えながら、更なる国の発展につながっていけばいいなと思わずにはいられません。

私は20年前のあの時、アフリカに残ったガテラの安全を願っていました。そして再び会い、現在に至っています。相変わらずワンラブは天災に見舞われたり、大変なことが待ち構えている状態ですが、実は今年はガテラと私が出会って25年目。私たちも区切りをつけるために、今年は何かど〜んと催しでもしようかと相談しているところです。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信50号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（9月～12月）

9月	247,500円
10月	1,305,417円
11月	833,185円
12月	851,576円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	21本
装具	12本
杖	154本
車いす	4人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思しますので、ぜひお譲りください。

【支援物資輸送の状況報告】

皆さまにご協力をお願いしておりました支援物資の状況ですが、現在物資を集めることは終了しております。

本来であれば今回の帰国の時に物資を送る予定をしておりましたが、輸送費が捻出できず、この段階での輸送を断念しました。

集まった物資は、この件に関してご協力いただいている女性の元に、現在も保管しております（長い間保管して下さっていること感謝いたします）、内容を確認し、バザーなどで資金に換えられるものは、そのような方法を取らせていただいております。いただいた物資は全てルワンダに輸送する予定をしておりましたが、度重なる洪水被害のため、建物の修理や、壊れてしまった機械・ダメになってしまった義足の材料などを購入する費用が必要となっております。活動を継続するために、どうしても優先順位をつけながら、予算を使っていかななくてはならないということをご理解いただけたら幸いです。

尚、バザーなどで現金に換えない分の物資については、予算と時期を見てルワンダに輸送するよう、引き続き考えております。

ルワンダに届け！という思いで物資のご寄附をしてくださいました皆さまには大変申し訳ないと思いますが、どうぞそのような方法を取ることも、また輸送が遅れていることをお許しください。

物資の収集は終了しましたが、引き続き輸送費のためのご寄附をお願いしますとともに、私たちもルワンダで運営しているレストラン・ゲストハウスにたくさんお客さんに来てもらい、収入を増やすよう努力を続けたいと思います。

がんばるぞ〜！

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信51号 2014年3月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

